大和文華館を去るにあたって

石澤正男

石澤館長

慌しい桜の季節もすぎ、新緑の爽やかな時候を迎えて、皆様方は益々活発に御活動のことと拝察します。私は、私自身の都合によりこの五月一杯で大和文華館に別れを告げ、東京の古巣に戻ることになりました。

振り返ってみますと、私が当地に単身赴任してきましたのは1964年の5月1日でしたから満17年を少しこえるることになります。

神奈川県大磯町に住み、東京にも文化財保護委員という重要な公職を持たれていた矢代前館長は、奈良へは大体月に数日滞在されて、館長としての采配を揮われることにしておられました。矢代先生としては奈良に常住して自分を輔佐する者をかねがね物色しておられ、私には前々から何度も奈良へ来ないかというお話がありました。然しいざとなると中々決心しかねる問題があって、延び延びになっていたのですが、私の病後の恢復が一つの契機になって、この年奈良行のお話をお受けすることになったのです。

この年は永らく待望されていた東海道新幹線が10月から開通し、またアジアで最初の国際オリンピック競技大会が矢張り秋に東京で開催されたりして、なかなか思い出の多い年でした。

私は1964年5月から次長として1970年11月までの6年半、それから矢代先生の後を受け継いで館長として10年半を大和文華館で送ったことになります。その間自慢になるような個人的業績が碌にないのは慚愧の至りですが、唯美しい環境と優秀な同僚にいつも輔けられて気持よく仕事のできたことをこの上なく仕合せだと感謝しています。

私が今、最も幸福に感じていることは他でもありません。それは素晴らしい後任館長として東京大学文学部名誉教授吉川逸治（よしかわいつじ）さんをお迎えできることに決定したことであります。吉川さんは東大文学部で美学美術史学科を1933年に卒業されてから間もなく、同年夏フランス政府給費留学生として渡仏、パリ・ソルボンヌ大学文学部に入学、1939年同大学でドクトルの学位を得られました。同年暮に帰国され、矢代先生が主宰されていた文部省美術研究所の嘱託となり、また東京芸術大学美術学部の前身東京美術学校の講師を嘱託され、やがて教授に昇任されましたが、この時代に私とも暫く同僚の時代がありました。吉川さんが美術史学の教授及至講師として講壇に立たれた主な大学は東京芸術大学、京都大学文学部、名古屋大学文学部、東京大学文学部、東海大学教養学部等々多数ありますが、その間に残された優れた業績は枚挙に遑がありません。学業の他に故松方幸次郎氏が欧州で蒐集された厖大な西洋美術品の中で、フランスに残されていたものは第二次世界大戦勃発のため敵国財産としてフランス政府に没収されておりました。それをフランス政府と交渉して遂に日本に返還されるに至ったのですが、最初にフランス政府側と交渉されたのが吉川さんであったことをお知らせしておきたいと思います。吉川さんが前館長の故矢代先生と極く近い関係にあったこと、令兄は東京芸術大学、愛知県立芸術大学の学長を歴任された故小塚新一郎博士であること、また中国文学の権威であった京都大学文学部教授故吉川幸次郎博士とは従弟にあたっておられることも併記しておきます。

最後に、大和文華館が、将来益々順調な発展を遂げられることを心から祈念しております。

季刊 美のたより No.55
昭和56年5月21日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.